341

特240
899

〔参考〕

支那共産軍に就いて

昭和十一年十一月
陸軍省新聞班

始

目次

一、序……一頁
二、共産軍の概念……一
三、共産軍の本質……三
四、各方面に於ける共産軍の現勢……七
五、最近共産軍移動の足跡……一二
六、結言……三八
附圖

特240
899

支那共産軍に就いて

一、序

支那共産軍の存在は、支那の動きに相當大なる影響を及ぼしつゝある。

今や支那に於ては中央政府に對する地方政權等と同じ樣な意味に於て特殊な勢力的存在となつてゐる。共産軍はこれ等の勢力と共に近代支那を銘々思ひ〳〵の方向に推進しつゝあるものと見られる。

その次に擧ぐべきは獨裁者蔣介石との相互作用である。實を申せば、蔣介石は共産軍の存在があつたからこそ今日の地位を築き上げ得た樣なもので、彼が今迄反對派を壓迫して自己の勢力を擴める祕策を弄し得たのは、利用したか利用されたか知らないが、共産軍との不可思議な關係が與つて力あることを見逃し得ないのである。

そんな譯で共産軍の活動を無視して現在の支那を論ずることは出來ぬ樣になつてゐる。我國では時々その活動の狀況が傳へられる丈けで餘り關心を持たれてゐないが、支那の內部的動きとして觀察すれば絕え間ない脈動を打ち續けてゐるのである。かの一昨年以來の大移動も、結果に徵して見れば單にその位置を變じた丈けに留り、一向實勢力は減じて居らぬのみか地形的には寧ろ有利化された感がある。從つてこの大移動で試練立證されたその根强さと相俟つて、共産軍の將來は逆睹し難いものがある。そこでかゝる觀點に立つて、支那共産軍の一般的觀察とその動きとを紹介して見たいと思ふ。

二、共産軍の概念

中國共産黨側の發表する所に據ると、共産軍は共産黨が武力鬪爭を行ふために有する武裝團體の總稱であり、その中には黨の正規軍とも謂ふべき所謂紅軍の外各種の義勇軍等が含まれてゐるとのことである。

併し共産軍の主體と看做さるゝのは紅軍であるから、この紅軍に就いて若干の檢討を加へたいと思ふ。

先づその組織を觀るに、方面軍、軍團、軍、師團、營、連、排、等に區分し所謂三單位制を採つてゐる。このことは支那一般軍隊と大體同樣である。併しさうかと云つてその內容は常に整然たる體系を備へてゐる譯ではなく寧ろ戰鬪に、行軍に、最近の樣な寧日のない動きを示してゐる場合には其の組織も相當雜然たるものになつてゐることであらう。又裝備殊に兵器の供給補充には相當困難を來してゐる爲、徒手丈けの兵とか、刀槍の類

しか持たない部隊も尠くはないと云はれる。

軍隊の外に多數の人夫、及び政治工作員を有してゐることは、他の軍隊に比べて特種な差異と認められよう。又各部隊の指揮機關中には一般軍事を掌るもの丶外、政治部乃至政治指導員を附設してゐる。この政治部員等は軍隊内部に對して將兵の政治的訓練竝に共産主義的精神教育等に任ずる外、戰時には一般支那軍隊に見らるゝ樣な督戰隊の任務にも服することゝなつてゐる。更に軍隊外に對しては共産軍占領地域に於ける行政及宣傳を掌る等廣汎な權限をも有してゐる樣である。

共産軍は、政府軍等に比すれば前述の如く裝備も不十分であるし、軍需品の補充には更に困難を極めてゐる。從つて政府軍等に對しては、白晝平地で堂々の戰陣を張る樣な戰法は避け、努めて交通不便な山間僻地に據つてこれを迎へ、好んで奇襲游撃の戰法を採用してゐる。又一方には軍事行動と併行して宣傳、謀略其他の政治工作を相當拔目なくやつてゐるのである。

共産軍が愈々一地方を占領すると、機を失せず共産政治區を建設して、土地法、勞働法等を施行し共産黨獨特の所謂工農政治を布くのであるが、その中でも最大の特色は所謂分田制度の施行、つまり地主、富農の持つてゐた土地を沒收して、之を貧農、窮民に公平に分配することである。これは連年の天災や爲政者の苛斂誅求等によつて疲弊のどん底に喘ぐ下層農民階級には、非常な魅力となつてその效果も見るべきものがある。

三、共産軍の本質

共産軍の本質如何の説明は極めて六ケ敷い問題である。世の中では種々雜多の解釋、觀測が行はれてゐるが、要するに從來の觀察から推して必ずしも純然たる共産主義乃至共産黨の軍隊であるとも云へない節もないではない。

共産軍の出現は昭和二年八月一日、當時國民革命軍の有力者、賀龍、葉挺、朱德の率ゐる三軍が、當時武漢政府を逐はれた共産黨の幹部と通謀して、江西の南昌を占領したこ

と（八一暴動事件と云ふ）に胚胎してゐるのである。爾來共産軍の構成分子の内容は幾多の變遷を見てゐるもの丶、今日尚その大部分は國民黨軍隊から離叛して來たものとか、その改編に際し共産軍に合流して來たものとかが大部分を占め、それに地方の土匪とか強制的に徵集せられた農民等が加はつて居るに過ぎない樣である。それであるから眞に共産主義に共鳴して飽く迄も階級爭闘に終始せんとする樣な連中許りだとも云へまい。従つてその行動に於ても、よきにつけ惡しきにつけ一般の支那軍隊と大した變りのないことも當然のこと丶首肯されよう。

次に中國共産黨との關係を觀るに現在共産軍は、中國共産政治區の最高機關と謂はれて居る中華ソヴィエート共和國中央政府内に設けられた工農革命軍事委員會により統制せられることになつてゐるが、事實は必ずしも爾かく單一整然たる組織系統によつて成立してゐる譯でもない。例へば、現に中華ソヴィエート中央政府主席たり又共産黨の元老たる毛澤東及工農軍事委員會主席たる朱德を初めその他の巨頭は、各〻共産軍内にその丼木勢力を擁して相對立し、殊に黨權派と軍權派との對立は時として外部に現はれる程深刻な場合もないではない。特に最近迄で各地に蟠踞してゐた共産軍首腦者に至つては、中央政府乃至黨部の指令を遵奉しないものも尠くなく、動もすれば軍事行動に於ても中央部の統制から脫逸し勝ちの狀態であつたとされてゐる。

以上の事實に徵して、共産軍は、未だ以つて完全な統制と徹底した主義信念とを有する軍隊ではなく、寧ろ共産主義を利用する一種の軍閥とも見られないではない。併しこれ等は、どちらかと云へば過渡的情勢の觀察に屬するものが多く、共産軍と雖も時と共に色々の變化を生じてゐるのであるから、現在の共産軍を目して一概に輕視し去ることも出來ないと思ふ。何となればこれを操縱して居る幹部は、共産主義に共鳴し又之を信奉してゐる者であり、更にその背後で絕へず直接間接の作用を及ぼしつ丶ある共産黨の存在をも無視することは出來ないからである。殊に前述の通り各部隊に設置せられてある政治部には、最も忠實且有能な共産黨員を配して共産主義敎育の徹底を期すると共に、

その權限を擴大して軍隊に對する共産黨の指導權を强化することに努力してゐる現狀であるから、その將來は決して輕視することは出來ない。

蘇聯邦の國際共産黨と中國共産黨乃至共産軍との關係に就いて申せば、相當密接な關係にあることは諸般の事象に照して容易に推測せられるところである。このことは、昨年夏蘇聯邦莫斯科で行はれた第七回コミンテルン大會の情況を見ても、或はその會議に列席した張國燾等が直接共産軍に身を投じて活躍してゐる事實に徵しても首肯し得らるゝと思ふ。尙ほ最近に於ては蘇聯或はコミンテルンの在支宣傳、金融等の機關を上海方面から北支に移し且之を强化したこと等は、他にも理由はあろうが結果に於て共産軍と直接連絡するに便利な情勢となつたことは否むことが出來ない。現在の蘇聯活躍に伴ひ世上流布せられてゐる蘇支密約の如く、支那中央政府の蘇聯接近初め、民間有力者連が私的にも蘇聯と手を握つて策動するものが著しく殖へつゝあるので、此等が直接間接に共産黨乃至共産軍に作用して居ることは、こゝ二三年前よりは餘程趣を異にしてゐると云ふべきである。又中國共産黨及共産軍の總經費として年額一千三百萬元は國際共産黨より依然として上海に送付されてゐるとの說もある。これ等の情勢から判斷して、かの國共合作當時華かなりし蘇聯の對支活動は、「ボロディン」「ガロン」等の支那退去によつて根底から覆されたものではない。寧ろその種子は順調に發芽し、蘇聯の近時に於ける國力の伸張に伴つて、支那の對蘇依存の旺盛化と共に將に繁茂期に入らんとしつゝあるのではないかとも考へられる。

四、各方面に於ける共産軍の現勢

前後七年の間、楊子江中流地方の江西省竝にその周圍の地方で猛威を振ひ、且優勢な中央軍及地方軍を以つて莫大の軍費を投じて實施せられた五回に亙る蔣介石の大討伐に對しても、頑として屈しなかつた共産軍の主力は、昭和九年十月頃に至つて、突如四川省方面に大移動を開始するに至つた。この共産軍の江西省放棄の眞因に就いては巷間種々

噂されてゐたが、要するに共産軍の孤立的活動地域から直接蘇聯と連繋する所謂西北路線への移動、積極的都市攻略から邊境地方に待機保身への轉移、並に膠著作戰から機動作戰への轉換等の結果かと思はれる。從つてこのことは、何等共産軍の衰退を意味せず、寧ろその將來活動の積極化を物語るものではあるまいか。

次に主なる共産軍の狀況を述べて見よう。

1　朱毛軍及徐向前軍

江西省共産軍の主力である朱德、毛澤東の指揮する約五萬の兵力は一昨年江西省から西遷を開始して以來湖南、貴州、雲南の各省を經て昨年六月四川省西北部に達した。この大移動は八個月に亙り三千粁の行程を踏破したもので、四周の剿匪軍を對手にしつゝ南支に於ける綜錯せる大河、重疊の山嶽等の障碍を跋涉し無事その目的を達したもので、軍事的に見ても吾人はその手腕に深く感嘆せざるを得ない次第である。

一方從來四川省東北部に蟠居してゐた徐向前の率ゐる約五萬は昨年春以來朱毛軍の移動に策應して西方移轉を開始し、中央軍を擊破して遂に昨年六月下旬頃に四川省西北部に於て朱毛軍と合體するに至つた。

併し該地方は標高五百米乃至千數百米に達する高山地帶であつて、荊棘未開の蕃地であり物資に乏しく氣候寒冷である等、長期に亙る大軍の駐留を許さない狀態であつた。それで合體した共産軍は七月下旬頃から再び北上を開始し甘肅、青海省境方面に移動し初めたのであるが、此間最高幹部間に俄然爾後の行動に就いて意見の扞格を來すに至つた。かくて蘇聯勢力に隣接する地方に到達して後圖を策せんとする毛澤東は、共産軍の中でも最も精銳な約二萬を以つて東北進を續け、甘肅、陝西省に侵入し陝西省を中心として蟠居してゐた劉子丹、徐海東等と提携して同地方に確乎たる地盤を作つた。扨てこの毛澤東軍は昨年の暮から山西省の西境を脅かし、閻錫山の必死の防禦陣も本年二月に入つて脆くも破れ、山西の大半が共産軍の跳梁に委されたことは讀者の尙ほ耳新たな所であると思ふ。この方面の共産軍の活動は中央軍數箇師の大擧

山西省進入等餘りにも大袈裟な芝居によつて――中央側の目標は共産軍にはあらで正しく山西の制覇に向けられてゐた樣であるが――世間への手前共産軍も手頃の所で打ち切つて又元の陝西、甘肅に還り、今やその主力は寧夏省方面から綏遠省方面に活動を試みて居る狀態である。

× × × × ×

翻つて毛澤東軍と分れた朱徳、徐向前の部隊は四川省に反轉し昨年末には成都西方の山地帶で活動を開始し、今年に入つてからは西康省に手を延ばし活躍を續けてゐたが、六月に至つて賀龍、蕭克の共産軍を合せたので、更に同地方で大飛躍を試みるのではないかと想像されたが最近の情報によると、この朱徳を中心とする部隊は、毛澤東軍と大同團結すべく又もや昨年秋の如く甘肅、青海方面を經て北進を開始し、既に合體を終つたと傳へられてゐる。

2 劉子丹及徐海東軍

從來陝西省北部には劉子丹、南部には徐海東が夫々共産軍の地盤を築いて居たが昨年秋頃兩者は完全に合體し、續いて既述の如く毛澤東の傘下に入つたのである。

3 賀龍、蕭克軍

賀龍、蕭克軍は從來湖南省西北地方に活動してゐたが昨年十一月頃湖南省西南部に向つて移動を開始し、その後はかの朱毛軍の西竄の經路にも似た移動を開始して前記の如く本年六月朱徳軍に合體したのである。

× × × × ×

この他、湖北安徽方面の徐彥剛、高俊亭、吳煥光、を初め江西、福建その他の方面にも殘存共産軍が今尚は出沒を續けてゐる樣であるが兵力も僅かであり、說明を省略する。

五、最近支那共産軍活動の足跡

昭和十年

一月の情況

（朱・毛赤軍）

昭和九年十一月江西省瑞金を中心とする中華「ソヴィエト」區を放棄して西方移動の途についた朱・毛赤軍は、湖南、廣西の邊境を經て貴州に侵入し、年末烏江を渡り、一月初旬遵義を占領し、更に北進して桐梓（遵義北方約十五里）松坎（桐梓北方約十五里―四川省境）を占領した爲、四川省主席劉湘は約十個旅の兵力で赤軍を四川、貴州兩省境の嶮を利用して迎撃せしめた。それが爲め朱・毛赤軍は松坎より進路を西方に轉じて四川、貴州、雲南の三省の境に近い赤水（河名）方面から之に近い四川省の叙永地方に侵入せんとして居たのであるが、四川南路剿匪軍は本月下旬土城（桐梓西方約二十里貴州省西北部）附近に於いて之と激戰し、赤軍第三軍團に決定的損害を與へて遂に赤軍の四川省侵入の企圖を挫折せしむるに至つた。

（徐向前赤軍）

昭和九年八、九月の交、赤區を擴大した徐向前軍は、依然として嘉陵江右岸地區の綏定、宣漢、蒼溪、儀隴、南江、巴中、通江、萬源の各縣に跨る厖大な地域を占領して四川剿匪軍と對抗して居た。所が朱・毛赤軍が貴州省に入り愈〻四川省に侵入せんとしつゝある事を察知して、その行動を容易ならしめる爲、先づ剿匪軍を牽制せんと欲し、南部、閬中、廣元方向に主力を集中して一月中旬、嘉陵江の突破を試むるに至つた。殊に下旬に至つては廣元、昭化方面に主力を集中して當面にある剿匪軍の戰線配備の交代時機に乘じ主力を以て四川、陝西省境に沿ひ西方に突出せんとしたが、剿匪軍の善戰により竟に阻止せらるゝに至つた。

（剿匪軍の情況）

一月十二日參謀團（主任賀國光）重慶に來著、委員長行營を設け剿匪軍の指導督察に當

り又中央軍（二個師の兵力）初めて入川して萬縣、重慶等に駐屯し四川軍の剿匪行動を督勵することゝなつた。

二月の情況

（朱・毛赤軍）

土城附近に於て打撃を受けた朱・毛赤軍は四川剿匪軍の迎、追撃を受けつゝ四川省南境地方を西走して遂に雲南省東北部鎮雄地方に侵入し、こゝで軍隊を整理した。かくて更に金沙江（揚子江上流名）を渡つて四川省に入らんとしたが不成功に終り、再び四川省南境に沿つて貴州省に歸り又もや土城、温水、桐梓等の地帶を徘徊した揚句南下して遵義を攻略した。遵義の攻略はこれで二度目である。

（徐向前赤軍）

一月末より萬源、通江、儀隴等（四川省東北部）の地域を漸次抛棄し、南江を中心として其の戰線を收縮し次いで北方に移動を開始した。

かくて一部は白水河に沿ひ甘肅に進入し、其の主力は廣元方向から陝西省に入り寧羌、畧陽、大安、沔縣、褒城（何れも陝西省西南端で四川、甘肅、陝西三省境界に近い地方）の各地を攻略して、將に南鄭（漢中）（陝西省西南部）を衝かんとしたが、南鄭には剿匪軍が嚴として控へ成功を見なかつた。

剿匪軍の情況

本月十日四川省政府が重慶に於て成立し、劉湘が省政府首席に就任した。又之れに伴つて各地方軍は其の防區に於ける政權を省政府に返還することゝなり、玆に蔣介石の四川省制覇の基礎工作が完了した譯である。

三月の狀況

（朱・毛赤軍）

遵義附近に於て剿匪軍の包圍を受け、東方に突破して當時湖南省大庸（湖南省西北部）に在つた蕭・賀赤軍と合體せんとしたのであるが成功せず、西に奔つて仁懐を掠め再

び四川南境に進入して古藺、叙永を侵略したが、執拗な四川軍の攻撃を受けこれ等と丁度「鬼ごつこ」でもする樣に更に北方より東方に奔り又もや桐梓、遵義を攻略した。これで三度目である。かくて朱毛軍は遵義南方にて烏江を渡らんとするに至つた。

（徐向前赤軍）

二月の末陝西省南部に入つた主力は、再び四川省中部に向つて捲土重來し、その果敢なる攻撃の爲剿匪諸軍は多大の損害を受け折角今迄奪回し得た儀隴、蒼溪等の地は再び徐軍の手に委せらるゝに至つた。かくて徐軍は其の主力を嘉陵江左岸に集め西方移動の機を窺ひ、剿匪軍亦極力之れを拒止することに汲々として居たが、月末に至つて竟に徐軍は蒼溪、閬中の間で剿匪軍の防禦線を突破し渡河に成功した。

剿匪軍の狀況

蔣介石は此月二日重慶に來著し、親しく剿匪軍を指揮し且つ四川省年來の秕政の改革に當つた。

四月の情況

（朱、毛赤軍）

遵義より南下して烏江を渡り札佐に於て剿匪軍と激戰の後、東進して湖南に向ふ樣子であつたが、安順、鎭寧より急に轉囘して貴陽を衝かんとした所、雲南軍に先づ阻止せられ、更に中央軍、四川軍によつて挾撃せらるゝことゝなり、南方廣西省境に逃れた。その後陣容を立て直し西に向つて遂に雲南省に入り平彝、霑益（共に雲南省東部）を占領し、月末に於ては嵩明より昆明（雲南）近郊に進出し、爲に雲南省城は震駭するに至つた。

（徐向前赤軍）

三月の末嘉陵江の渡河に成功した後梓潼を陷れ成都は大恐慌を來した。

かくて嘉陵江左岸の同軍は全部右岸に移動を了り同河左岸地區の巴中、南江、儀隴は剿匪軍の手によつて囘復せられた。徐軍は更に涪江（嘉陵江支流）沿岸に進んで江油を

圍み次いで彰明、中壩を陷れ遂に涪江の守を破つて西進した。

五月の情況

（朱・毛赤軍）

昆明（雲南）に肉薄したが敢てこれを衝かず、西北に走つて無人の境を行く如く祿勸、元謀を陷れ金沙江を渡つて四川省西南に入り通安に至るや俄然こゝで、劉匪軍と遭遇することゝなつた。併し朱毛軍は遂にこれを擊退し得て會理を攻め更に北進して德昌を取り、其の東方巧家、昭覺より來つた羅炳輝の別軍と寧遠（西昌）に會し、劉匪軍の迎、追擊を巧に外らしつゝ冕寧を經て大渡河（河名）の線に進んだが、この線を守る有力なる劉匪軍と對峙するに至つた。

（徐向前赤軍）

本月に入り更に石泉（北川）を占領し更に南下して安縣に迫つた。かくて主力は西進を續け茂縣を取り岷江（成都附近を南北流する河）江岸に達したのであるが、朱・毛赤軍の四川省南部に侵入した情報を知つたらしく、これと協同する爲茂縣より理番に向つて占領區域を擴大し又汶川方面にも近迫した。

（劉匪軍）

中央軍が昆明に到著後十日蔣介石は同地に赴き金沙江、會理の戰況を視察し貴陽を經て二十二日重慶に歸著、二十六日成都に赴き參謀團も亦成都に移つた。

六月の情況

（朱・毛赤軍）

大渡河の線に主力を集結した後一部を巧に機動せしめて主力の渡河に成功し、天全、蘆山、寶興（成都西南二十數邦里）を抄掠しつゝ北進し遂に懋功（成都西々北約二十五邦里）に於て徐向前赤軍と完全に合體することゝなつた。

江西省を出發して大移動の緒について以來實に八箇月の間、或る時は北よりする中央軍、或る時は南よりする廣東軍、或る時は所在解らぬ地方軍からの迎、追擊、さては

十字攻撃を浴びつゝ險峻の山河を跋渉し、竟に待望の四川に入り徐向前友軍と合體し得たのであり、その行動や壯とすべく、この難事業を巧に切り拔けた指揮者の手腕たるや洵に賞讃に値すべきものであらう。

かくて朱・毛赤軍は第一線の警備を徐向前赤軍に委ね、四川省西北の山間僻地である上下包坐一帶の地區で休憩に就いたのである。

餘談であるが、この朱・毛軍の移動部隊と、徐向前の收容部隊との合一に際しては、朱・毛軍は本軍と云ふ關係からか、その幹部には傲岸なる態度があり、徐向前軍の將兵共は大に憤慨する所があつたが、これも共產軍大局の爲と我慢して、朱・毛軍の勞を犒ひ萬端の世話をしたと傳へられてゐる。

七月の情況

朱・毛・徐向前兩軍は合體後新しい行動に出づるべく漸次岷江右岸地區に兵力を集中することに努めた。

此頃は剿匪軍とは餘り觸接もせず所謂雌伏期であり、又土地柄が他と隔絕した邊陬であるので特記すべき情報もなかつた。

八月の情況

（朱・毛・徐赤軍）

主力を毛兒蓋及雅爾、隆河流域に集中した赤軍は東は岷江の索橋を燒却し、南は雲山の險要に依托して、これに小部隊を配置し、剿匪軍の進攻を防守することゝした。併し何分にも地形は嶮峻、土地僻陬で軍需品の補給には困難を極め、共產軍は具さに辛酸を嘗めた樣である。

この間、赤軍の首腦部は毛兒蓋に於て今後の方針を討議する所があつた。その席上毛澤東は甘肅より陝北に入り蘇聯に近づかんことを主張したのに對し朱德 張國燾、徐向前の一派は南進說を固持して、四川省、西康省方面を圖らんとし、俄然主腦部の意見は對立することゝなつたが、各將領は未だ妥協心を棄てず下旬に至つて南進派は不本

意ながらも北進派と歩調を合はせることゝし、全軍は二縱隊となつて北進を始めた。

九月の情況

毛兒蓋一帶の地區から北進を始めた赤軍は甘肅省境に至つた時、毛澤東と張國燾とは又もや獨自の意見を主張して激論を始め、大喧嘩の末兩者は全く分裂するに至つた。處は支那西北の祕境、靜寂の山中唯聲ある白龍江の急湍を前にしてこの兩將は聲涙に咽びつゞ終日論爭を續け、居竝ぶ將卒は默々としてその所說を聽いて居たと云ふ。

かくて毛澤東は第一、第三團を率ゐ北進を繼續し、張國燾は第四、第三十軍を率ゐて、毛兒蓋に歸還を始めた。

一方別の縱隊で北進中であつた朱德、徐向前も人跡無い險峻の山路に行惱み、これ又南方に引返すことゝなり、途中毛兒蓋で張國燾と合體し、月末にはその部隊が四川省西北境大、小金河沿岸に出沒する樣になつた。

十月の情況

（朱・徐赤軍）

新に成立した朱德、徐向前の聯合軍は朱德を總司令、徐向前を副司令として陣容を整へ、中旬に至り南下を開始し初めた。劉匪軍は慌てゝこれに對抗したが及ばず月末には蘆山、天全、寶興方面は再び赤軍の占領するところとなつた。

（毛澤東赤軍）

先月張國燾と分裂して北進を續けた毛澤東の率ゐる部隊は、岷縣、武山、通渭、平涼を經て此月に至つて遂に陝西北部の劉子丹赤軍と完全に合體した。

（劉匪軍）

蔣介石は初旬西安を經由して四川の地を離れた。

十一月の情況

（朱・徐赤軍）

朱、徐赤軍は破竹の勢で天全、蘆山を取り、更に名山、雅安を包圍して成都西方二十

邦里足らずの大邑、功崍に迫つた。省城成都は爲に二度目の脅威を受けたが剿匪軍は辛ふじてこれを拒止し得た。

(中央軍)

四川行營を本月一日重慶に設立し顧祝同これが主任となつた。

十二月の情況

(朱・徐赤軍)

朱・徐赤軍は剿匪軍と前月の狀態で對峙してゐる一方梁經を占領し更に一部は大渡河河畔の富林に達し剿匪軍の攻勢に應じて逆襲に轉じ懋功、金湯、寶興、蘆山、天全の各地は完全にその占據する所となつた。

(山西赤軍)

十月陝西に毛澤東、彭德懷が這入つて劉子丹と合體してからは、次第に勢力を扶殖した。かくて二重、三重に圍んだ中央側の剿匪陣を尻目にかけて山西省を覘ひ初め閻錫山以下山西當局必死の防衞陣も黃河結氷期には愈、危險視さるゝに至つた。

昭和十一年

一月の情況

(賀・蕭赤軍)

南下を始めた賀・蕭匪(約三萬)は、湖南省西南部武岡一帶の地區に於て兇暴の限りを盡し、本月四日頃には貴州省東部銅仁及晃縣を攻略した。かくて主力を以て青溪、石阡に向ひ西進したが二十日以來東北方に移動し江口、印江、思南一帶に集結、一部を以で烏江の渡河を、主力は秀山、德江方面に北進を企圖する模樣となつた。

(朱・徐赤軍)

朱德・徐向前の聯合赤軍は依然として四川省成都西南地區(丹巴、瀘定、功崍)に蟠居し、大邑方面に一部の活動を試みた外、殆んど全線活動休止の狀態だが西康省中心地帶に進出の企圖あるものゝ如き素振りもないではなかつた。

（剿匪軍）

一月初め賀・蕭の討伐に當つた陳誠を軍長とする四箇師は、湖南省南部に出動したけれども、唯これを監視するに過ぎない狀態である。又該匪の貴州省侵入に際しては二箇師の剿匪軍は烏江左岸にあつて之を阻止し、南方よりは五箇師を以て、又一箇師一旅の兵力は銅仁、玉屏、青溪の線に、松桃、銅仁方面には二箇師の兵力を以て包圍態勢を取りつゝあるが行動甚だ緩漫である。

又廣西軍も出動してゐるが、軍隊の指揮系統は雜然として行はれないし、且目下軍資金も缺乏の情態であり討伐の實行は事實上不可能である。從つて廣西軍は正規軍主力約四箇師を桂林、懷遠の北方地區に集中し、匪軍の南下を廣西省内に一歩も踏み入れしめない様に努めて居るに過ぎない。

二月の情況

一、中、南部方面

（賀・蕭赤軍）

一月以來西方移動を繼續し、二月七、八日頃には畢節、大定地方に侵入した。又その一部は遵義方面に、主力は雲南省北部を經て四川省南部に進出の模様であつたが、本月中旬から剿匪軍の總攻擊を受け、然かも寒氣に襲はれ糧食缺乏し、爲めに疲勞其の極に達したと傳へられてゐる。

（朱・徐赤軍）

その後依然として天全、蘆山地方に蟠居し、主力を以て賀・蕭匪と手を握るべく漸次南方に移動を開始せんとしたが、中旬剿匪軍に擊破せられて北方に敗走した。これが爲賀・蕭匪との合流は地形其他の關係上當分見込がないことゝなつた。

二、西北方面

（毛澤東赤軍）

二月下旬黄河の結氷期も愈〻終末を告げんとし、山西の閻錫山は虞れてゐた共匪の

侵入もこれで先づ一安心と思ふ矢先、陝西省内で隱密に準備した共產軍は徐海東軍を先鋒として突如山西省に侵入し、見る／＼の間に拔くべからざる地步を築き上げた。閻錫山は急遽對策を講じたが自力では如何とも出來ない狀況となつてゐた。

剿匪軍

剿匪軍は十一日、朱德、徐向前匪軍の總攻擊を行ひ蘆山、天全附近の一部を囘復した。又一方賀蕭匪軍に對しては約七箇師の兵力で追擊中である。

三月の情況

一、中、南部方面

（賀・蕭匪軍）

水城、威寧に向ひ移動中で、雲南省東北部を通過し四川省西南部會理、西昌地區に入る模樣であつたが、突如方向を北方に轉じ鎭雄を攻略し十四日潯章俱(省境)に於て剿匪軍と激戰、よくこれを擊破し主力は難なく昭通に侵入した。

（朱・徐赤軍）

剿匪軍に擊退せられ理番地區に敗走して居たが、賀・蕭匪との合流企圖を倘捨ないもの〻如く、遂に西康省に侵入し懋功等に若干の遊擊隊を殘置し、主力は既に道孚を占領し、更に西康省を南進するものと判斷されてゐる。

（高俊亭匪軍）

これは徐海東の殘部約三千で、湖北省東部羅田、麻城、黃安地方及安徽省英山附近に蟠居して居たが、一月以來蠢動を開始し、各縣保安團を襲擊する等最近頓に其勢を增して來た。

四　西北方面

（毛澤東赤軍）

徐海東軍掩護の下に主力は相續いて黃河を渡河し山西省南半部に雪崩れ込んだ。毛澤東は黃河々畔に在つて全軍を指揮したと云はれてゐる。

本月末頃に於ける山西省侵入赤軍の總兵力は約二萬と判斷せられる。

劉匪軍

一、湖北省東部に於ける高俊亭匪討伐の爲に、二箇師を麻城、黃安方面に増援を命じた。

二、山西省に於ける毛澤東赤軍の侵入に際しては、中央部は、待つて居ましたと許り、腕利きの陳誠を將として中央軍、中央系數箇師を省內に急派した。

四月の情況

一 中、南部方面

（賀・蕭軍）

三月中旬昭通に侵入した賀・蕭軍は、附近一帶を擾亂した後、三月末再び貴州省盤縣を攻略、該地附近にあつたが更に、曲靖より尋甸を經て四月五、六日頃普通河及二哨附近に於て雲南軍と相當の激戰をしたが克く之を擊破し昆明、祿勸の中間地區を西走し二縱隊となり、蕭克軍は羅次、祿豐、鹽興を經て十八日桃安に、賀龍匪の方は廣通、楚雄を通過し鎭南に達した。之が爲大理地方は極めて危險の狀態となつた。

（朱・徐赤軍）

依然大なる變化はないが漸次鑪霍、甘孜附近に占領地區を擴大するに至つた。

二 西北方面

（毛澤東赤軍）

三月山西省內に奔注した毛軍は、劉匪軍を尻目にかけて活躍を續け、次第に分裂作用を起して赤化の地下工作を始めた。但し中旬以降首腦部及一部の兵力は再び陝西省方面に歸還を初めるに至つた。

（劉匪軍）

一 賀・蕭赤軍の討伐に從事して居るは約四箇師團であるがとり立てゝ述ぶべきことはない。

尚一方四川省方面の劉匪軍は、懋功を奪回し別に一箇師と協力して西康省へ追撃中である。

二　中央軍は山西省に進入して愈、省の軍權を牛耳つた。併し何しろ共産軍に比し兵力の餘りにも大なる手前、赤軍は次第に省外に驅逐せられざるを得なくなつた。この赤軍、中央軍の行動は最初から狎れ合ひの計畫的のものとの消息通は見てゐる。

五月の情況

一　中、南部方面

（賀・蕭匪軍）

情勢大なる變化なく逐次兵力を西北に移動してゐた。

（朱・徐赤軍）

依然として西康省東北部に蟠居してゐたが、一部を南方稻城、定鄉に派し中旬雲南北部附近より金沙江を渡河北進せんとする賀・蕭匪と相呼應するに努めつゝあつた。これに依つて一月以來の兩者合流企圖實現の日も亦遠くはないことゝなつた。

（劉匪軍）

貴州省にあつて追撃態勢を取りつゝあつた雜軍八箇師、中央直系特務團二千名は目下盛に拉夫、車馬の徵發を行ひ爾後の攻撃を準備しつゝあつた。

二　山西、陝西方面

（毛澤東赤軍）

本月初旬山西省を撤退し陝西省に歸來した共産軍は、主力を延川（延長北方）、瓦窰堡地區に集結した。その兵力は約一萬と稱せられ、五月十四日文安（瓦窰堡の南）附近に於て爾後の行動に關し會議を開催したと云ふ。

（共産軍とソ聯との關係）

五月十五日瓦窰堡に於ては約一千名の政治工作員を教育中で其の指導者の主なるものは蘇聯人「ゾトク」及江蘇人博古だと云ふ。尚ほ匪軍には蘇聯人數人の居たことは

確實で其内一人は共產軍が四月中旬山西省に侵入した際、同省內濕附近の戰鬪に於て戰死し、山西側に收容せられた點から見るも明である。

（劉匪軍）

山西側の剿匪の計畫は、山西省に入省してゐる中央軍（商震軍を除く）の大部及山西軍の一部、總計三十箇團を以て離石西方陝西北部を占領した後南方に向ひ、又南にある張學良軍（兵力を更に增加す）はこれに應じて北に向ひ攻擊し、此の間山西軍は黃河に沿ふ山西省境を守備し共匪の山西侵入を防止して之を殲滅すると云ふのであつた。

六月の情況

一 中、南部方面

（賀・蕭赤軍及朱・徐赤軍）

進路を北方にとり鶴慶、劍川、麗江附近を經て、中旬北方地區に於て金沙江を渡河し西康省に侵入し、主力は定鄉より理化に、一部は松擦より巴安に向ひ前進し、西康省東北部甘孜、鑪霍、道孚一帶に蟠居して居た朱德、徐向前と小金河に於て完全に合體した。その兵力約五萬と稱せられ同地附近で軍の整頓、改編をなすに至つた。

二 西北方面

（毛澤東赤軍）

依然として延川（延長の北）、瓦窰保一帶の地區に蟠居し、逐次兵力を充實し既に二萬に達し、其主力は最近甘肅及綏遠方面に向ひ移動を開始する模樣だと云はれ、保安を中心とする地域にあつた。尙其の一部は定邊（陝西省西北省境）及慶陽（安化）（甘肅省東北部）方面に進出したもの丶如くである。

一方毛澤東及徐海東匪の主力は當時寧夏省東南部に在つて、鎭戎附近に約五千、環縣附近約二千及環縣より南方に亘る地區に約三千の兵力を配し、此等各地は已に攻

略せられてゐる。

（劉匪軍）

約三箇月の豫定を以て共產軍を包圍殲滅すべく豪語して居たが意の如くならず、殊に附近一帶は給養困難、交通は不便であるし、剰へ各派雜色軍の連合作戰である等困難な事情の爲、西北方面に對する剿匪作戰は一段落を告げたと觀るべきである。

七月及八月の情況

一、中部方面

（朱・徐・賀・蕭合體赤軍）

小金河に於て合流した朱德、徐向前及賀龍・蕭克匪軍は、七月下旬甘孜（西康省東北部）に於て幹部會議を開催した。その結果朱・徐軍は道孚より黑水河、松潘を經て甘肅に入り毛澤東軍と合し、賀・蕭軍は甘孜より青海を經て蒙古に入るべく決議した樣で、朱・徐軍の先頭は八月上旬既に甘肅方面に行動を開始した。

（劉匪軍）

右に對して剿匪軍は約六師を以て松潘、理番、撫邊の線に配置して其前進を阻止することに努めた。

× × × ×

十月の情況

八月以後の共產軍行動は杳として知る由もなかつたが朱德、徐向前、賀龍、蕭克等四川、西康省方面から北方に移動しつゝあつた全部隊は十月頃になつて甘肅省西部地方に大擧進入し、從前から同省東部及陝西省方面に蟠居してゐる毛澤東以下の共產軍を合算するとその兵力約三十萬と稱せらるゝに至つた。

これに對し剿匪軍は中央軍十數萬、張學良の指揮する舊東北軍約十五萬、陝西綏靖主任楊虎城の指揮する陝西軍約十萬、甘肅軍約五萬、總計約五十萬に垂んとする兵力が陝西、甘肅地方に於て共產軍に對抗してゐる模樣である。

これ等の剿匪部隊は、當然西北剿匪副司令張學良の指揮下にあるべきであるが、彼の勢力は舊東北軍のみに限られてゐると謂はれ、中央軍は悉く甘肅綏靖主任朱紹良の指揮に屬してゐるらしい。又陝西綏靖主任楊虎城は、前二者に對して別個の存在を示してゐる樣であるから剿匪軍を統制することは仲々六ヶ敷く、數に於て優勢なる剿匪軍は、例によつて單に共産軍を監視するに留り、若し共産軍が決死的活動を開始すればどんな結果を招來するか全く豫想はつかぬ情態となつてゐる。

尙ほ最近の情報によれば、この共産軍は逐次東方及東北方に當る北支、內蒙古方面に移動を開始してゐるとも傳へられてゐる。

六、結　言

以上が共産軍の最近活動の情況である。何はともあれ優勢な剿匪軍を對手として、一向辟易する所なく思のまゝに振舞ひ、今やその集散離合も落ちつく所に落ちついて、大部が西北に集結を了したことは何と云つても彼等の態勢に一轉機を劃した次第で、今後の成行きが注目される。

然し吾々として更に見直す必要のあるのは、その活動が漸次國際的になりつゝある點である。既に新聞等に傳へられてゐる通り、支那共産軍は北に居るのも南の方のものも、總て民衆と共に抗日を標榜し、抗日の爲には政府を鞭撻し、政府が抗日の態度を執るならば、これとの妥協をも敢て辭せないと云つてゐる。

一　山西に侵入した毛澤東、徐海東等は抗日聯合戰線結成の聲明を發して各方面に呼びかけ注意をひいたが、確報によれば共産軍は最近モスコーの第三インターナショナルよりの指令に基き從來の戰術を一變して支那に於ける各國帝國主義に對して必ずしも同一の態度を取る必要はなく、最も脅威を受けて居る日本の帝國主義にのみ鉾先を向け、日本の權益工作に重點を置くことゝなつた爲と云はれる。（昭和十一年四月十七日　東朝）

二　紅軍第二方面軍政治委員任弼時、第三軍長賀龍、及び中華蘇聯中央執行委員蕭克等共産軍首腦部は十七日雲南省廣通に於て連名の宣言を發表、雲南州康區民族革命政府を樹立して左の要旨の宣言を發表した。

雲南、四川、西康三省の被壓迫民族を軍閥の羈絆より解放革命戰線を擴大強化し而て後一大民族革命軍を結成、民衆を總動員し北上して友軍に協力し誓つて抗日革命線の先鋒たるべし。（昭和十一年四月十九日　中外）

以上の宣言は支那紙でも盛に傳へられて居る所で單なる空宣傳では無い樣だ。我々日本人の中には、動もすれば常識判斷で人離れした支那の邊疆に居る共産軍に何が出來るかと云ふ風に疑問を持ち、更にそんな得體の知れぬ共産軍の放逐は「デマ」だと稱して、輕侮の念で迎へるものも尠からぬと思ふ。併しそれは認識不足で、そこに警戒を要するものが伏在してゐるのではあるまいか。

「支那ソヴイエト政府及赤軍は支那の滅亡を救ふ爲、日本に對して鬪爭を行はんとするものがあれば、その政治團體乃至軍隊の如何を問はず直ちに共同戰線を張ることを約すると共に、支那の獨立を支持すべき如何なる國家とも友好關係を結ぶの用意がある」

（張　國　燾）

「日本は支那革命運動の大なる目標となつて居る。支那共産黨は敢然抗日鬪爭を開始するや、先づ一九三二年の上海日本工場に於ける大罷業を起し、次いで各地に抗日示威運動を釀し滿洲竝日本の占領せる地方にはパルチザン戰爭を行ひ、更に上海事件にたいては上海確保の爲勇敢に活動した。然し從來國民黨勢力下の小ブルジョア及知識階級間に於ける工作が不十分であつたので目下大に努力奮鬪中である。」

（コン、シン）

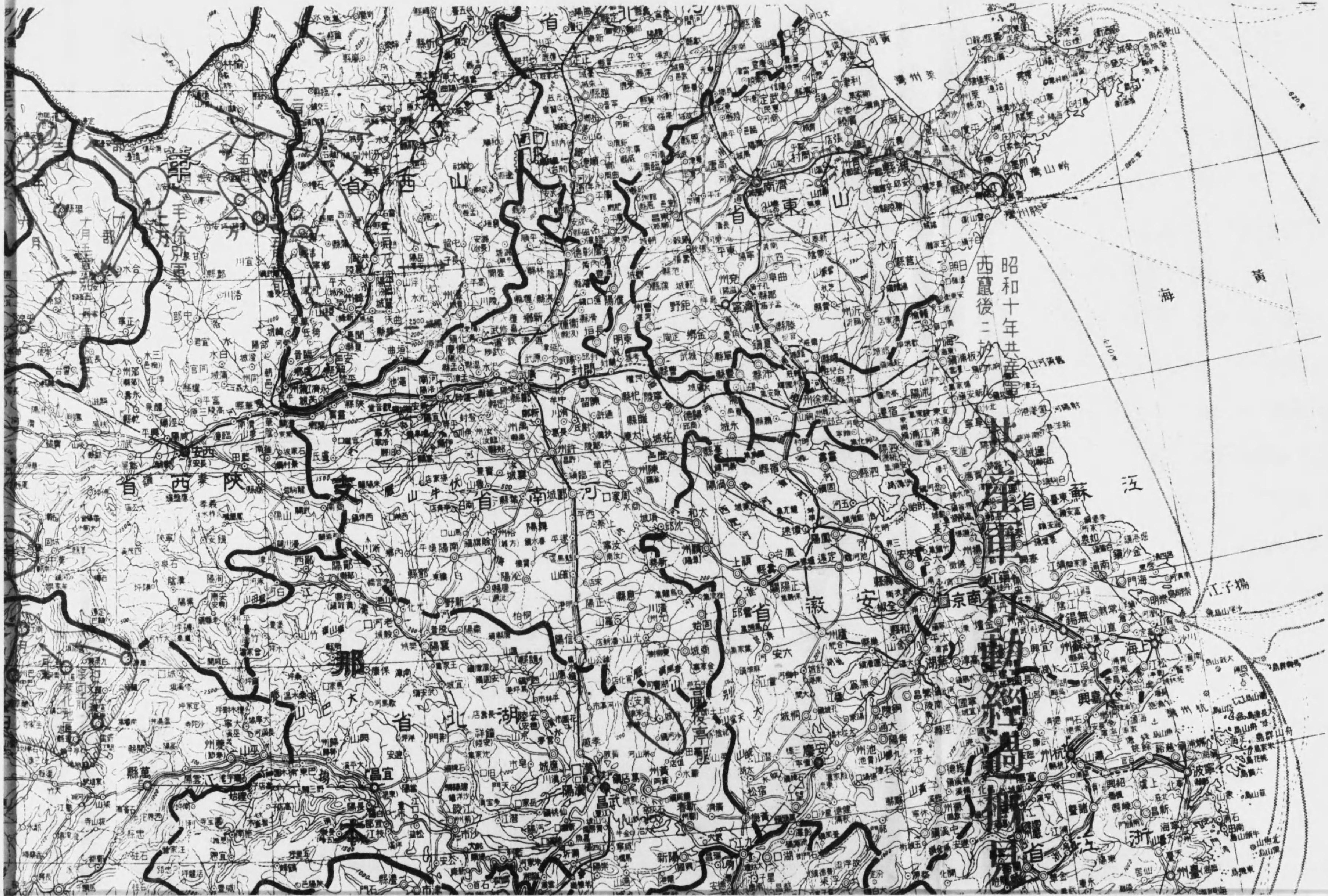
右は支那共産黨代表が昨年七、八月の間にモスコーに行はれた第七回國際共産黨大會の席上で演説したものであるが、この外コン、ユアンにしろ、陳紹禹にしろ、その他の連中も、大體これと同樣なことを唱へて居る。即ち、ちやんと昨年からこれからこうやりますと廣告してゐるのである。而してこれ等の連中はその後續々支那本國と交通し、張國燾の如きは現に共産軍中に身を投じて直接活動して居る一人であることは既述の通りである。

尤も支那共産軍の活動の本源はソ聯のお筆先によつたものではあるが、この筆法で大膽に、直接に、我國に對して工作に努めつゝあるのであるから馬鹿にしたものでは決してない。閑話休題前記昨年の「コミンテルン」大會には、日本代表として岡野（本名野坂參貳）、田中（本名山本懸藏）、西川某等が出席して支那代表に劣らず活躍したことは周知の通りであるが、我國にも祕密裡に文書を送つて來たり、又最近の樣に米國を通じて彼等仲間に宣傳文が來たりして、その影響が昨今表面に現はれてゐる。かの「コミンテルン」

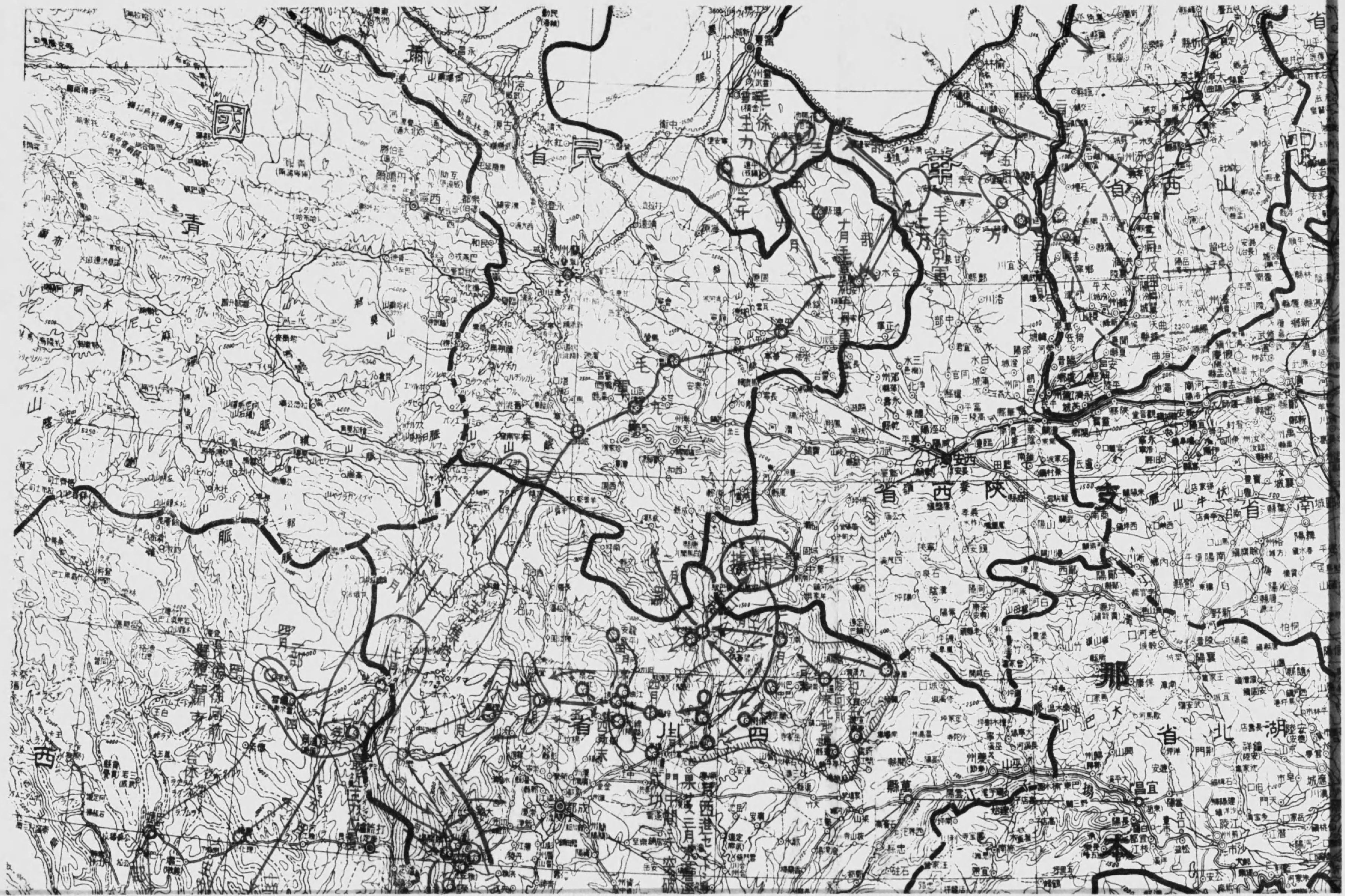
の赤化新動向と云ふべき「反ファシズム統一戰線强化」、「帝國主義者の世界大戰準備擊破」なる二大目的の達成が第七回コミンテルン大會議決の新戰術――「分派的對手觀念一掃」、と「ブルジョア迄も含む大衆獲得」を絶對必要手段と認める――に基いて所謂『人民戰線』と云ふ標語の下に大衆に呼びかけられだした運動もその一例である。これを見ると、支那共產軍の遣り方は、日本の共產黨よりも一歩先きを行つて居るとも云へる。そんな次第で、支那共產軍は一から十まで總てがこれ式とは思はれないが、その企圖する所を遠慮なく謂ひ行へる點、赤の祖國が後に控へ、隣り近所は皆紙一重の差しかない連中許りであること等は、我國として對岸の火災視することを得ないものがある。

飜つて我國は支那に關して幾多問題を持つて居ることは申す迄もないが、表看板からのソ支密約、ソ蒙相互援助條約等と相俟つて、「コミンテルン」の擔任とする裏道からの策謀によつて學生の排日運動、民衆の抗日觀念等を助成し、更にこれを他の勢力と絡ましめて全面的支那の對日對立を激化せしめんとするソ國の策動に關することも亦無關心たることを許さぬものがある。最近に於ても北支防共に關する論議が新聞紙上を賑はしてゐる。かゝる際にコミンテルンの企圖する日本工作の大陸路に横はる一の媒介物、支那共產軍の動きを觀察したのも强ち徒爾でないと思ふのである。

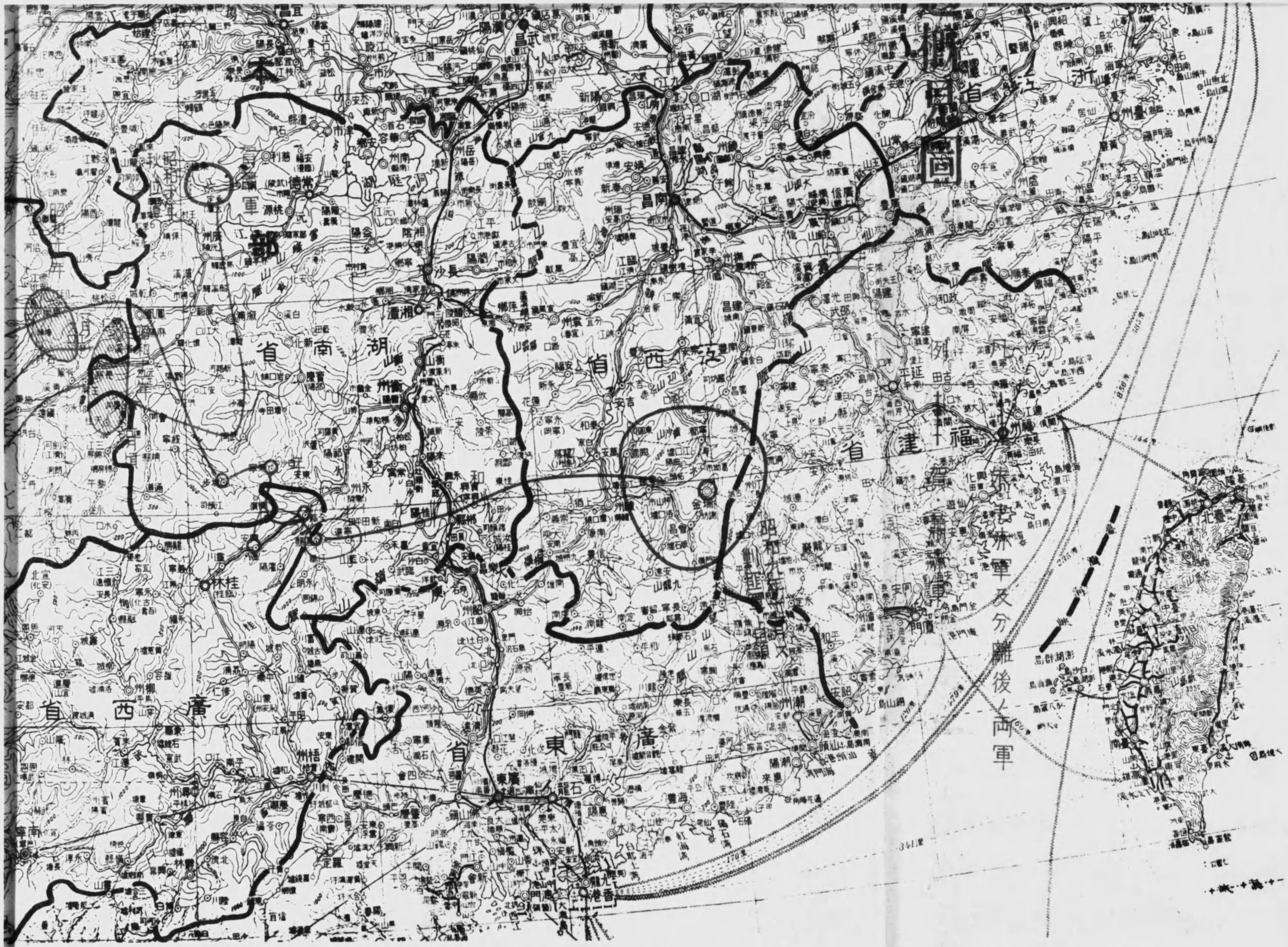
青



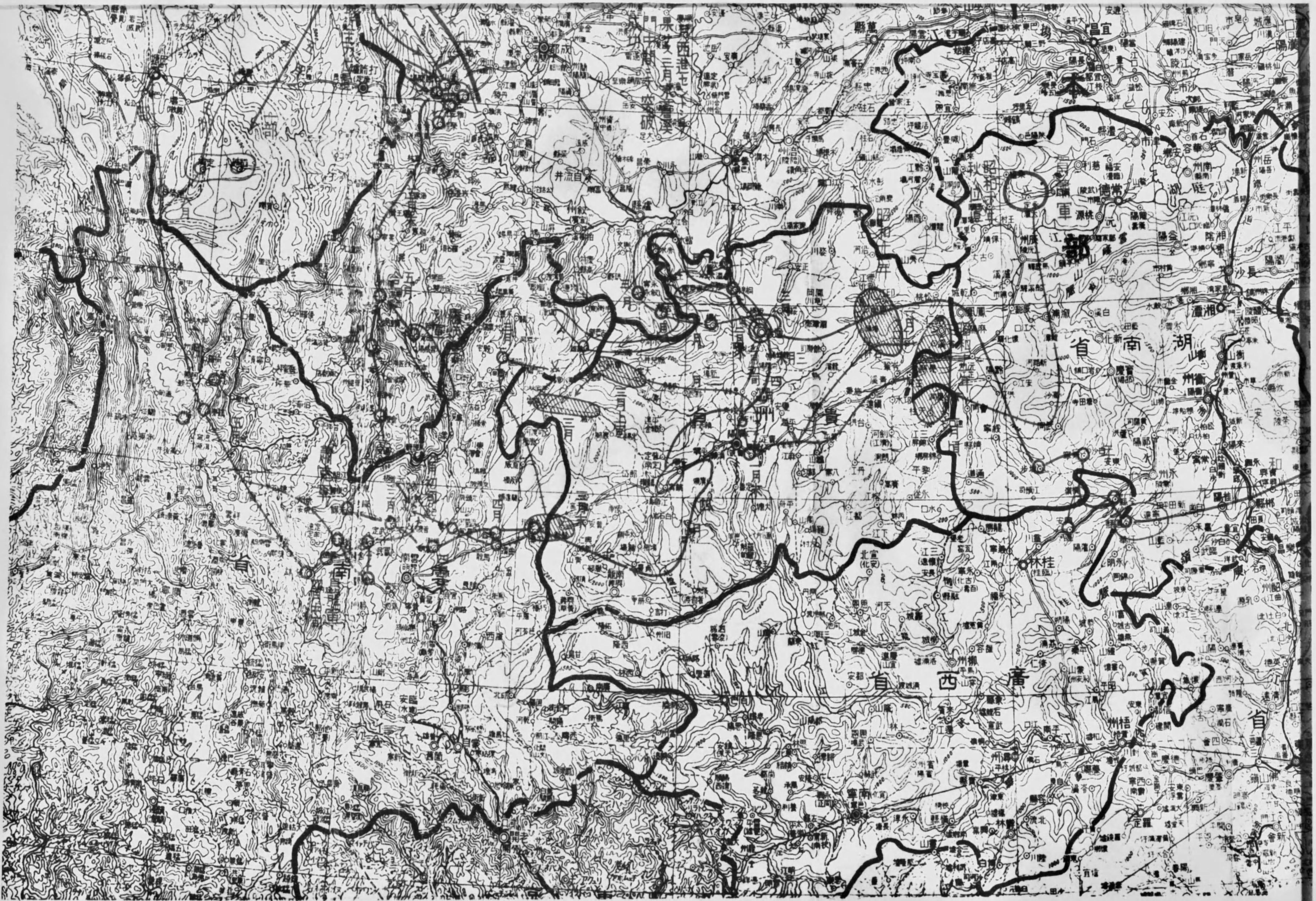
昭和十年共産軍西竄後ニ於ケ
共産軍行動經過概見
山西省
山東省
河南省
陝西省
安徽省
江蘇省
湖北省
黄海
南京
上海



陝西省
湖北省



湖南省
江西省
福建省
廣西省
廣東省



廣西省
湖南省
桂林
柳州
梧州
南寧
常德
長沙
宜昌

329
5-89

昭和十一年十一月一日印刷
昭和十一年十一月五日發行

陸軍省新聞班

終